二十一世　智見院日近　中津輕郡獨狐村咸應寺へ轉住
二十二世　特妙院日信　天保十四癸卯年十月十五日入寂
二十三世　唯識院日琳　弘前本行寺へ轉住
四十三年大火焼失　この代弘化三年には間口九間半奥行十間の本堂再建されたこの建物は惜い哉明治四十三年五月の青森市大火にて類焼の厄に遭ったのである其建物左の如し
本堂総十一間横九間三尺。庫裡縦六間横十八間。鐘楼台縦二間横三間。妙見堂縦五間横六間
二十四世　唯導院日運　弘前法立寺へ轉住
二十五世　大真院日淳　明治三十三年八月廿六日入寂
日淳は二十六世尭現の伯父に当り旦其師である
二十六世　尭現院日濤　現代
一日濤師は安政二年二月本縣北津輕郡金木町角田信太郎二男として生れ安政五年十月十三日木造町寶相寺角田尭秀師に就

いて得度し慶應元年三月水戸三昧堂に入り同年五月初めて法輪を轉じ同三年四月まで在林す明治八年四月學終へて郷に帰られた

特旨を以て僧正に進む

明治七年教導職を命せられてより少講義大講義僧都に進み明治八年八月天台真言両宗の事務係を本縣より命せられてゐる大正四年三月三十一日大僧都權僧正に昇進され明治九年九月十二日當寺住職を命ぜられ寺務及公務に盡されし事多大である昭和五年九月十五日附を以て五十余年間宗務の功勞に特旨を以て僧正に叙せられた、爾後六十年の久しきに渝り德望一世に高く八十余歳の高齢を重ねて今猶矍鑠として教化につとめられてゐる。

寺跡昇格

一明治二十七年二月十六日大本山妙顕寺小林日董師の特命により紫金襴寺跡に昇格され亦明治三十三年九月十三日日運宗総本山身延法主日良大僧正より茶金襴五條袈裟壱枚下賜されてゐる。

復興再建

因に記す茶金襴の袈裟は日蓮宗にありては朱山と同資格の寺院又は僧侶の有位に非ざれば是を着用なりざるものなりとして同師の深誓を思ふべし

一明治四十三年五月三日青森大火の砌大風猛烈にして當寺に延焼し、宗祖大師木像鬼子母神一躰たけ難を免れ其他諸堂宇悉く烏有に帰した、再後本堂再建に意を用ひ青森大火及關東大震災に鑑み鉄筋コンクリート建てとした更に戦事変事を考慮し間口十三間奥行十六間にして和洋折衷の一大巨刹を建立する事になつた、想代世話人はより長谷川寿吉、三浦永太郎福士儀助の三氏を建築委員とし日濤師の弟子堯序師と共に寢食を忘れ東奔西走して淨財を募集し昭和二年十月十一日地鎮祭を挙行された同四年九月其竣工を告げた、工費実に二十数万円実に寺檀和合一致協力の結晶とも云ふべく千人二千人を容れて座席に窮せりと云ふ雄大な建物である今や檀徒千三百有余倖僧日持上人の靈地として法燈の永く耀くことであらう。

一 境内

當寺の旧記録を見ると古書類或は田地書物其他のものも有つたが取上げられたといふことが書かれてあるので詳しくは知る事が出来得ないが寺屋敷並田地に就いては現存の覚書や古過去帳等に依て大体窺い知ることが出来る六代日超上人の書いた蓮華寺過去帳録(註録)に左の如く記されてあるのが最初のものである。

「當寺往古屋敷之古書出喰大破後後代忘失恐故に六代日超書之古書に曰く寫」

一(註録) 庵屋敷東自西江五十尋南より北江五十尋東方浦の往来迄七尋半北の方海邊まて一百七十三尋南西の方野原まて六十四尋なり横内まては七里なり(六丁一里なり)浦の三良助なわはる。けんぶ人人横内之彌三右門

「西七月十七日　此時寺の貞信書之

是れは法華庵と称へた時の寺屋敷なるべし又四世日逸師代天和三年の過去帳に

寺屋敷

一表六十三間但東西門前是は六尺竿一間拵て御前帳に有
一裏六十五間但東西
一長さ八十四間、北ドリ南ハ境迄
外に二百十坪田地有之吟味之上に而申上無相違者也
貞享三年三月廿八日　日意代」
貞享の検地水帳には
一高十四石六斗五升三合　法花宗　蓮華寺
此反別
屋敷七十間七十八間半　壱町八反三畝五歩
右堂社境内林治屋敷は従古来除来に付新検吟味之上前々之通除之者也
貞享四丁卯年五月
物奉行大導寺隼人　同間宮求馬　元〆武田源右エ門　同田口重兵衛
御検地奉行太田茂左エ門　今治兵衛
（青森縣藏）法華一宗境内什物記

一境内東西六十三間半　柾葺
一客殿八間　十間半　柾葺
一庫裡五間　十間　柾葺
一茶之間二間　三間　柾葺
一番神堂　五尺四方　板葺
宝永元甲申年九月十二日
以上を以て見ると寺屋敷も洋証番以前ドリ拝領しおつたことが明かである。
るゝ亦面積も現在より廣かつたことが知られるのである。
一現在境内坪数二千五十坪四合
一什物
（青森縣藏）法華一宗境内什物記に記載されておる分
本尊并佛具什物　印ハ焼失什物　印ハ焼失を免れし什物
印ハ新調せし什物
一題目　本尊　一幅
一釈迦佛　一体

㊐一多寶佛　一体
㊐一上行菩薩　一体
㊐一無辺行菩薩　一体
㊐一浄行菩薩　一体
㊐一安立行菩薩　一体
㊐一文殊菩薩　一体
㊐一普賢菩薩　一体
㊐一愛染明王　一体
㊐一不動明王　一体
㊐一持国天王　一体
㊐一毘沙門天王　一体
㊐一廣目天王　一体
㊐一増長天王　一体
㊐一大黒天　一体
㊐一七面大明神　一体

○一鬼子母神　一体
○一十羅刹女　十体
○一日蓮之木像　一体

㊐一天蓋　一懸
●一華鬘　二懸
●一鈴金　一懸
○一推鐘　一口
㊐一鏡鈸　一雙
●一科註箱　一通
㊐一柄香爐　一通
○一題目本尊　十二幅
○一法華經　八巻
●一文句　十巻
●一文句記　一部

●一科註　一部
●一宗祖書　四十巻　一部
○一涅槃像　一幅
法衣什物
●一七條袈裟　三領
○一五條袈裟　二領
師範妙法山本行寺住職住心院日義弟子生国津軽
入院　元祿十三庚辰年九月五日
當寺六世一興院日超五十二歳
寶永元甲申年九月十二日　本行寺㊞

一境内堂宇
一妙見堂
本尊妙見大菩薩
由緒　貞享三丙寅年（三百四十九年前）当寺檀家中にて創立

一蓮華寺歴代　渡辺佐助　豊田太左エ門　長谷川與助

墓記

○二代渡邊佐助　當市米町味噌製造業を以て有名なる渡邊家の家産を興したのは二代の渡邊佐助である。渡邊家祖先は宮城縣白井町の出で同町仲町渡邊佐吉の二男佐助といふ人であるこの人の奉公した處は江戸靈岸島の丸屋といふ家で諸大名相手に金貸業を營んでゐた関係より丸屋家は常に津輕藩御用をつとめてゐたそれて初代佐助は時々主命を帯びて青森に來り弘化元年主家を辞するに及び永住の目的を以て当青森に來り伊東善五郎の取持ちで米町現在の丸屋を買ひ白石町宗家の屋號井（井丸）の○を取り佐助のさを入れて㋐とし㋐丸屋佐助と号した、渡邊の姓を稱したのは後の事である今でも渡邊家を呼ぶに㋐或は丸屋といふはこのわけである、

初代佐助夫婦に子供がなかつたので新町長谷川勇助の二男を養嗣子に迎ひたこれは則ち二代佐助である、この人は天保二年四月廿四日の生れて幼名を孫作と云ひ後佐兵衛と改めた文久二年五月二十三日初代佐助死亡後家督を受け襲名して二代佐助と改め家業の味噌製

造を主宰することになつたのである、
渡邊家の味噌製造業を始めたのは弘化四年初代佐助の移住後間もないことで今日に至り八十年の歴史を待つてゐる初代佐助の遺産にも依つたろうが次第に営業を擴張して二市政界に進出するに至りしは実に二代佐助の努力に負ふところ大なるがあつた且又常に中央実業界の人と交際をつゝけ渋澤榮一安田善次郎等と親交ありてしば〳〵中央に出て経済界の実情を知るにつとめた人である其商業の方針は堅実な保守的で石橋を叩いて渡る主義であつた、殊に同族間の貯蓄を奬励し積善譜なるものを興して相互の扶助機関にされた明治廿六年青森商業會議所の創設さるゝや推されて會頭の職に就き亦青森電燈株式會社の創立の際にも柿崎家淡谷家大坂家の人々と共に参画する処あり是又推されて專務取締役社長の職に就いた、常に公共慈善の念に厚く罹災及貧困者への施與の金品勤からざるものあり其他學校新築市公共事業に寄附せしことも多大なるものであつた、

この人の私生活は厚ち「勤倹」の二字に尽くるといふべしである今其一二を

挙ぐると

着類の質素は言ふまでもなく如何なる場合も手織木綿を着し履物は必ず足駄ばかり穿いてゐたしかも雑木の安物ばかりであるそれは歯の減ると入替へてはけると云ふのであつた、酒は殆んど呑まない煙草は始終口にするが必ず手製の保呂(ホロキ)煙草のみを飲用してゐた主人の勤倹斯の如し一族は勿論丁稚奉公に至るまで其風に化せられ倹素勤勞の風習自ら家訓となつてしまつた渡邊家の家産をして鞏固ならしめた其遠因は茲にあるのである、

只この人の楽みとせしことは閑暇〳〵には必ず分家を訪問し子供や婚達の歓待に満足して寛ぐことであつたしかも只無口の方でニコ〳〵と心からの喜びをされることであつた、

其趣味としては和歌俳句を好み俳句は白井日電を師とし『盧句集』と題する句集今猶同家に存してゐる亦刀剣類を好み鑑賞等に秀て頭痛のあつたときでも刀剣を見ると直く癒ると云ふてゐる程であつた眼冴えて夜眠られぬ時は燈下明皓々たる刀剣を放つてづッと見入れ精神三昧の境

涯に入る事4時々ありたと言はれてゐる明治三十三年四月廿六日歿す
年七十歳蓮華寺に葬る。

○白井沖龍

この人は安永年代の人で馬術に長じ亦柔術をよくし信明、寧親二公に仕へた殊に印顆彫刻及鋳物に妙をきわめた人で、其後商は国道通り茶舗白井雄作に傳はつてゐる、

この家の由緒書によれば甲斐国白井川原の城主であつたが戰死し京都寺町大雲寺に墓がある其孫白井嘉右エ門遺跡を継き伊勢山田に住して御士となつてゐた其弟は白井才兵衛守龍といふ強勇の人で身長六尺一寸馬術に勝れてゐた故ありて浪歴してあつたが年四十の時信政公に仕へ享保十六辛亥年二月信壽公代江戸足軽に召された六十一歳にして初めて一子を擧けたこれ則ち沖龍である。

沖龍の印顆鋳造に巧なることは実に絶妙の域に達してゐた、壯年より鋳物細工を好み彫刻技を磨き製作する処の器物並銅印数千顆に及び其印譜十余冊家に藏されてゐたが青森大火の際類焼に罹つた其印顆廣く古印譜の意を探り得て漢土の閑雅の風あり廣く世に行はれ諸侯及高風士の需に應ぜしこと勝けて数へ難いことであつた、安永年間淮后院宮様へ御銅印二個を献上せられ家傳由緒書に左の如く記されてゐる。

御印面上 [享保帝子]

文曰享保帝子　一銅印蟠紐　一銅印連環紐淮三后
一品親王命使白沖龍鋳之
安永九年庚子春　東江処士源鱗記□□

其他信明公寧親公の命によりて御銅印を献呈し亦寧親公の命により龍の御床置物長五尺大のものを鋳造献上されてゐる。

更に又寛政六年の頃より享和年代に至り六十余年間信心祈願をこめて大國尊十体を作り寧親公の御所望により一体を献上したが之を聞傳へて諸侯に献上したものも多数に上つた、之れと同時に稲荷尊像一体を唐銅造に鋳造し法華經一部一面一題目を細字に書し及寧親公御梁等の御祈念文と共に其腹中に納め御厨子に男青龍造作龍八尺を模様にされて寧親公

に献じた是れは大川端親御屋敷稲荷尊体として御勧請遊ばされた公初め嗣子信順公御一門等参拝あらせられ当日父才兵衛附添登城あり御感賞として里羽二重御紋付御羽織白銀十枚被下置た

沖龍幼より花学に天文字の手筋あり大食にして甘き物を嗜み、好んで餅を食ふ亦俳諧を能くし其日庵素丸を師とし遊歌は逸堂に就て奥秘を極む亦旅行を好む著す所速歌遊編記四冊自行観心抄四冊上野紀行一冊ある天保四癸巳年三月十五日歿す

男青龍家を嗣き文化七庚午年御小姓を仰付られ亦銅印の鋳造をよくし文化十三庚寅年七月淮伯院宮様の尊命にて銅印四ケを献上されてある男白井彦蔵青森に移り茶店を開業し浅田祇年の門に入りて俳諧をよくし明治二十七年十二月歿す男嗣き以て現代に至つてゐる。

○佐藤源太左エ門豊尋

豊尋の墓は今蓮華寺にある碑名には「得浮院殿豊尋日光居士」明治二十三年十月十六日とある、

この人は承昭公時代の人で御用人をつとめ家禄三百石である尊王佐幕の議論天下に澎湃たりし時江戸詰になつておつた錦旗東して幕府征討となり慶喜公遂に恭順の意を示されたとき吾藩の向背に一歩を誤ることあるを憂ひ将軍恭順の報を徹らし晝夜兼行三日にして弘前に着いたのである其時西館孤清近衛公の親翰を持し海路弘前に着し勤王の一途に出つべき議論の最中にあつたので藩論一定についても與つて力ありしと云ふ明治二年海防の議起り津軽藩でも幕命を受けて西浜海岸の守備を厳した此時源太左エ門は大隊長に補せられ鰺ケ沢に滞留し西海岸の守備の任を全うした事終り官より賞賜金五十両を下されてある。

今この人の祖先を尋ぬるに佐藤源太左エ門豊仲と云ひその父喜左エ門は松平陸奥守に仕へ五百石にて足軽頭相勤めおりしに故ありて浪人となり御国に下つておつたのである、明暦三丁酉年三月信政公代二百石にて被召出諸　物頭相勤めた、天和二ヶ戌年越後高田二十四万石領の内検地方御用の際元〆役として総奉行大道寺繁清同役間宮憲隆等と相勤め貞享元甲子年御加増大国付仰付られ二の年藩内惣検地の場合も元〆役相勤め元禄七甲戌年御近習頭となり信政公に従ひ数度参勤交替の御供などされて

ゐた実に理財に長じ藩政上功勞の多大な人である豊尋は其子孫で廃藩後青森に移り蓮華寺門前に寓居し同寺の住職竟現和尚と親交を重ねたりしと歿する時年六十であつた其玄孫は今橋本小学校の教員をされてゐる。

○清水周次郎

青森長嶋町森家に生れ後ち清水家の養子となる画をよくす始め吉崎北陵の門人となり東京に出て黒田清輝の門人となり洋画を學び號を非折といふ後ち漫画を學び其技芝居役者絵を書くにむも妙を得てあつた、後歸を旭と改め前途有望の画家であつたが昭和四年七月廿六日年三十八で歿した

○篠原善次郎

この人は鹿児嶋市に生れて明治十五年青森市に移住された先見の明あり独立独行よく自己運命を開拓された人である、明治十六年荷車製造業を始め亦青森弘前間の乗合馬車運行を開始して乗客貨物の輸送に便したが数年の後病を得て一時事業の頓挫を来たし、生活に苦しみし事もあつて焼芋商を始めた事もある、鉄道開通と共に北海道との間に果物雑穀等の移出入業を営み三十五年紙漉業を創め何れも成功して家産を造るに至つた。

氏嘗て人に語つて曰く吾れの家産は社会の與へたものである、ひとり子孫の為め私すべきでないと、この信念より社会奉仕の念厚く其為め私財を投じた事は多大なるものである、

大正十二年「時」の記念日なる六月十日に金一万円を市に寄附して午砲台を設けさせたのも此の人である市内に乗合自動車の運轉を開始したのも此の人である大正十五年には自己経営の自動車六台金一万五千円を市に寄附したので市では更に交通部を設け現在市内往復に便益を與へてゐる、実に氏は市交通上の恩人と云はなければならぬ官之を賞して紺綬褒賞を賜り市は亦胸の胸像を公園内に建立して其功勞を永遠に表彰されてゐる。

○柴田一奇

青森塩町に住し屈指の寫真師で縣下斯業の白眉である、夙に寫真術を研究し遂に功を成し明治二十三年巴里世界大博覧會に出品して銀牌を受領

亦遠州流挿花師で市内門人が多数ある大正九年三月廿六日年八〇歳で歿
された。

○豊田太左衛門

下北郡川内村の生れで吉森移住後横町に住し石場屋の姓を受けて豊田と
改めた、刻煙草雑貨商を営み家産を作つた檀寺の為めに尽力し私財を投す
ること多大であつた、弘化年代蓮華寺本堂(間口十間奥行九間半)を建築された時は建
築費八百両を要し檀徒二百戸の負担であつたので豊田一家で三百両の寄
進された同家は初代以来蓮華寺の総代をつとめてゐる大正六年八月十一
日死亡年六十三現代主は寺町に住し呉服商を営んでゐる。

安定寺 杉畑圖

照林山安定寺元禄六癸酉年
開基初杉畑ヨ建元禄十天癸未年
新町移轉
杉畑
八十四軒
此軒三十五軒
安定寺
杉畑
田地
浦町
杉畑
三十八軒
青果卸取場
蓮花寺
蓮心寺
正覚寺
常光寺
北

照林山安定寺

青森市新町七十七番地

一宗派　眞宗　本願寺派

一縁起

當寺の創立を案するに黒石藩圓覺寺隱居釈念西和尚の創開であつて元禄六癸酉年四月青森町奉行屋敷の後方杉畑へ一宇を建立し同年七月廿八日より圓覺寺道場と號し開基を為したのである、杉畑とは念西和尚が藩の許可を得て今の浦町交番所附近より柳町角までの一圓の地え杉樹を栽植して將来寺院の維持基金に充てやうとされたのである。後世其杉樹を伐尽されても尚青森の人々は杉畑なる名称を以て呼んでゐたのである、念西和尚が斯く植林事業を起し寺院の維持をこの収入に依らうとされた慧眼は真に敬服すべきである、而し乍ら当時の藩情は如何なる事由のあつてか知る由もないが一に本願寺東派を崇び西派の勢力を得るを欲せざるものゝ如くありしかば自然夫れに壓迫されて布教上大に困苦を感したものゝ如くであつた。

二世　釈教知和尚に至り藩の事情も漸く和らぎ元締役乳井貢の取持に依り檀信徒の隨信自由なるを得て元禄十六癸未年六月二十三日本山本願寺第十四世寂如上人代に至り安定寺なる寺号の公称を許可せられたのである。同年中杉畑より現在の新町の寺屋敷に移轉し縦七間横七間の本堂を建築されたが明治四十三年の青森大火で類焼されたのである、この教知和尚の代より三代諦山和尚代に渉り藩廳へ献納せし杉苗は実に百万本に近く且其杉畑を立木そのまゝ全部藩主へ献納されたので其功績にて同寺維持に充つる為め永代經米を許可せられ且青森町中及深沢各村落より申受くる儀を仰付られたのである。

文政八乙酉年に至り七世壽教和尚寺子屋を開始し子弟の教養につとめ八世意教和尚代に至り尤も隆盛を極め、明治廿年九世大静和尚代まで継續された其前後業を受けたるもの実に三千余人の多きに達してゐる現在青森市に於ける故老名士は殆んど当時の教養を受けたものである、当寺の地方文化の為めに尽されたる功績は甚大にして特筆記念すべき事である大正十三年十一月に至り仮本堂及庫裡を建造して今日に及ひ一方現今寺

檀協力の下に大火焼失建物の複興を計画し近く工事に着手せんとされてゐる、茲に開基以来十三世二百四十二年を経過し以て今日に及んでゐる。

一　歴世

開基	念西	行年九十歳	
二世	教知	仝 八十五歳	
三世	諦山	仝 七十三歳	
四世	西岸	仝 七十六歳	
五世	佛壽	仝 五十七歳	
六世	智教	仝 七十一歳	
七世	壽教	仝 六十四歳	
八世	意教	仝 五十六歳	
九世	大静	仝 六十歳	現代
十世	巨教		

一境内
一敷地 坪數　千四百四十三坪　東西三十七間南北三十九間
一仮本堂　間口六間半・奥行五間
一仮庫裡　間口七間　奥行五間

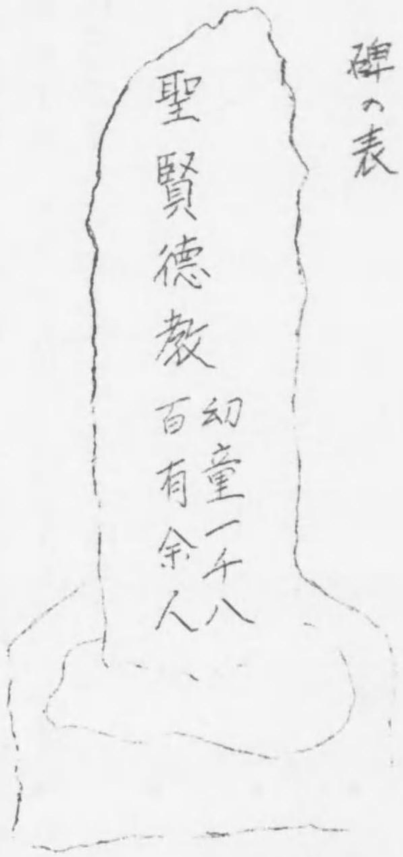
一寶物
一阿弥陀如来画像　恵心僧都筆
一六字妙號　法然上人筆

一安定寺惣代　長谷川信太郎　福岡政次郎　大岡半右エ門

一壽教和尚彰徳碑
當寺の境内に左の如き碑が建てられてある、これは明治六年七月当時その教育を受けたる筆生等の彰徳追悼の為め建立されたのである其筆生の

人々は或は故人となり或は老齢の境にありと雖も何れも青森に於ける旧家名士の班に列せし人々なるを思へば壽教和尚の遺徳亦大なるものがあるっ

碑の表

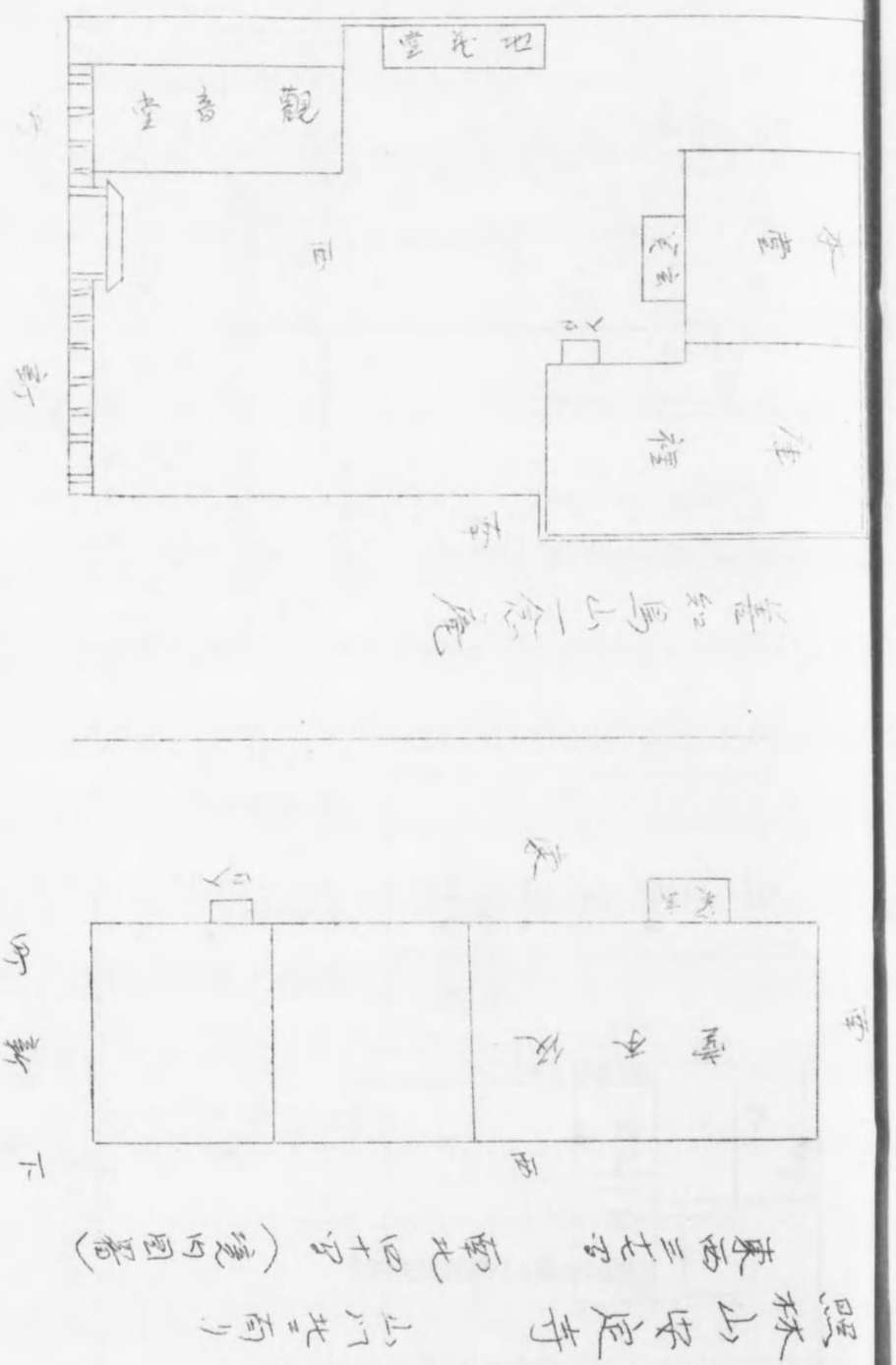


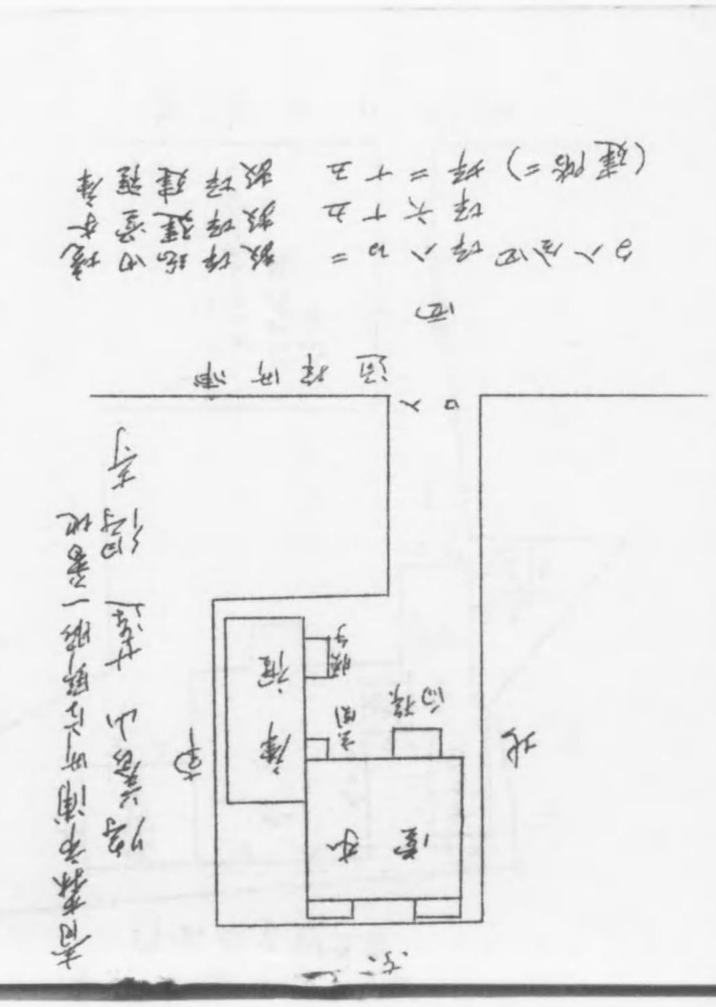
碑の高さ台とも十尺

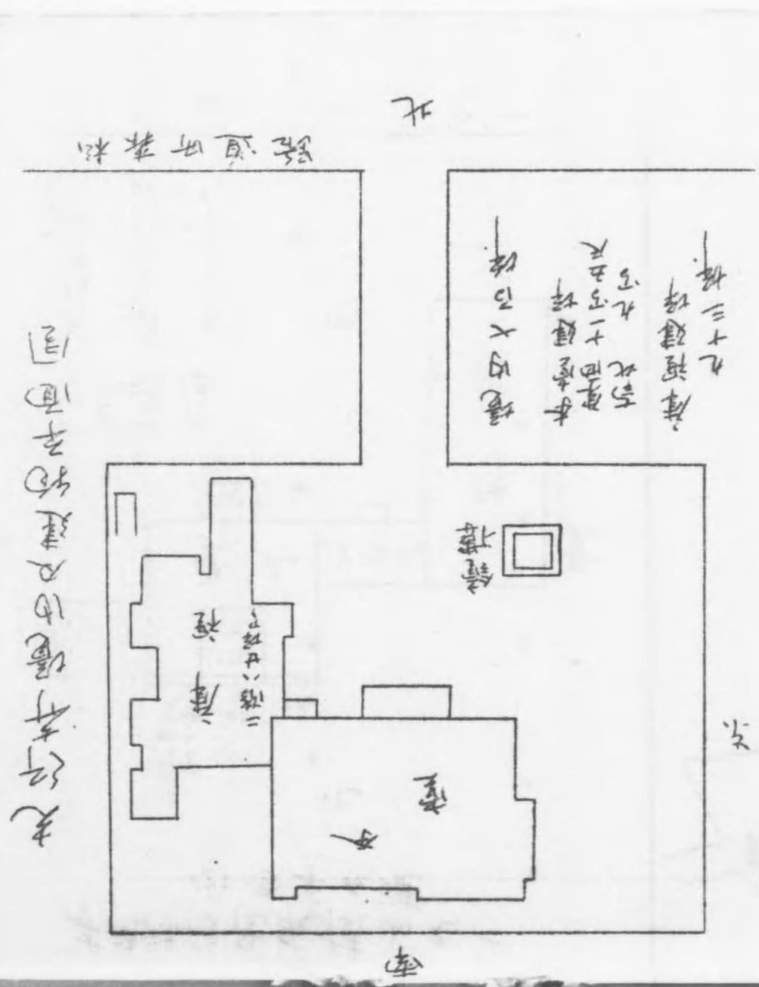
裏　明治六年第七月　石工
當山七世閑居教興軒六十四歳建之弘前　三浦平吉
第弟中　仝上　西沢音吉
仝上　八十吉

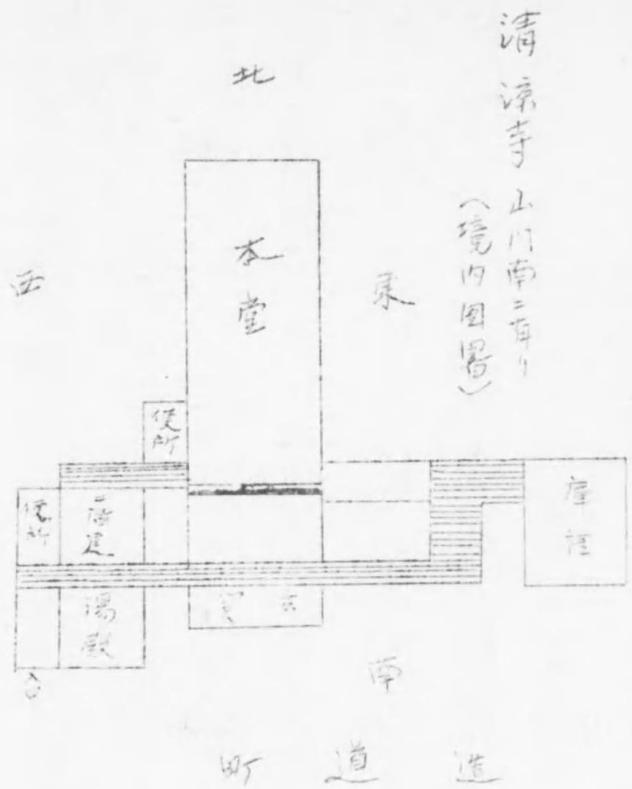
尚筆第中重なる名士の姓名を列記してその遺徳を追想しやうと思ふ。

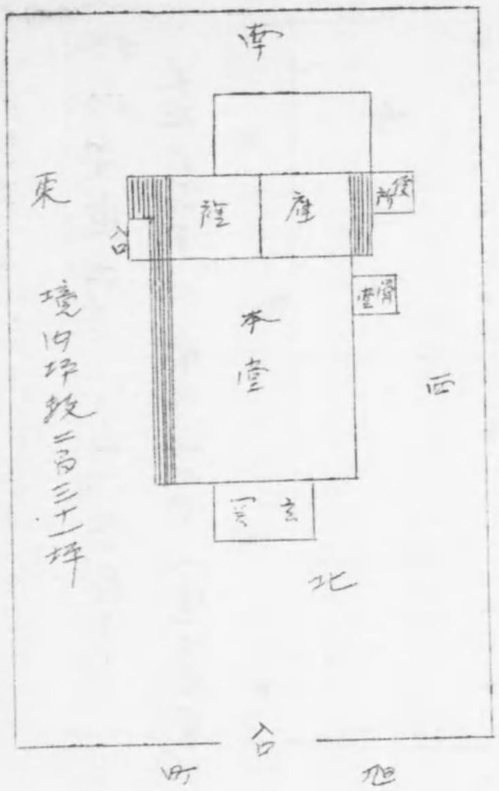
大井民吾　伊藤定五郎　西沢伊兵衛　濱田吉兵衛　斎藤末吉
高谷英太郎　樋口喜輔　柏原彦太郎　淡谷清藏　三橋重作
七尾重兵衛　村林勘六　高柳豊次郎　小笠原宇八　津幡富三郎
秋村末吉　原子仁兵衛　水野吉九工門　窪田三郎　中村松右工門
佐藤末吉　池野健吉　（以下略之）

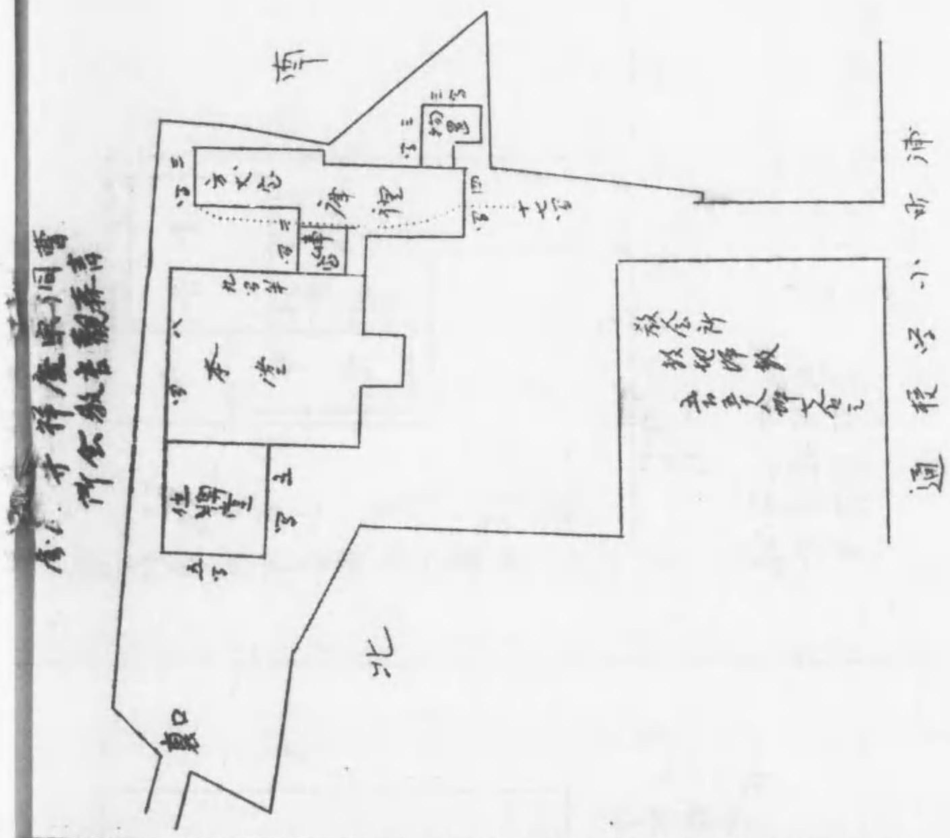



南禅寺南門内より勅使門一番地
門番小屋 大正四年
庫裏
客殿
玄関
便所
通路
北
東
西
南
道路

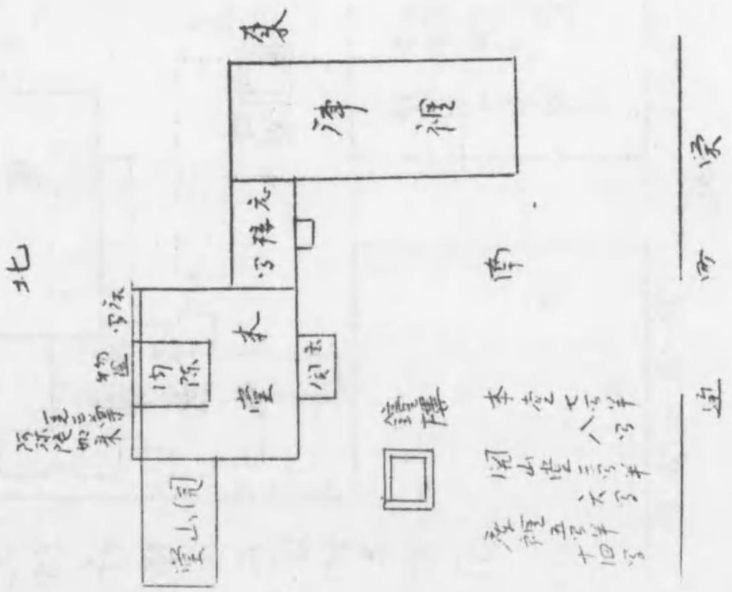

大行寺境内及建物平面図
庫裏
客殿
三條ハイカラ
鐘楼
境内坪数二百三十一坪
本堂建築年代不詳
大正五年九月
南
北
東
西
読経所森松


清涼寺 山門南二有リ
(境内図畧)
本堂
庫裡
便所
湯殿
玄関
北
東
西
南
道路


東本願寺説教所
本堂
庫裡
便所
玄関
境内坪数二百三十一坪
東
西
南
北
入口



寺院外観取摂山丸一
(国重要文化財)



一光山攝取院 阿彌陀寺

青森市榮町五十八番地

一、宗派 浄土宗 名越派正覺寺末

一、縁起

當寺は明治十四年一月当市正覺寺蓮社龍辨和尚の開基された処である、当時此地附近一帯は草叢地でこゝに些かなる墓地が存在してあつた、時人誰いふとなくこの墓地より亡靈の出現を言傳へたので附近の人々はこの噂さに危惧の念におびえておつた、布教の擴張と人心の安堵に着眼されし龍辨和尚は此地に寺院建立を決意されたのである、明治十九年九月其筋の許可を受け阿彌陀寺の寺號を称し本堂縦七間横七間庫裡縦十四間横五間の新築に着手十一月竣工された明治三十四年四月六日大工町より出火し西風烈しく堤町栄町に延燒し当寺も又類燒の厄に遭つた、明治三十五年十一月仮建築を了し更に大正十一年九月再建工事に着手し正覺一万七千余圓を費して現在の本堂庫裡を新築竣工されたのである。

この寺の梵鐘は開基の当時発願主紫田正念尼等の寄進につとめ当

地の諸中寺又是に協力され外ヶ浜は勿論に及ぼす遠く南部地方までも行脚し古鉄古鏡等を蒐集し鋳造されたので其鐘声雄大に律音異様に響くので有名である、これが古鏡が混合されておる為めて古鏡には金合の含有量多き故だと傳へられてゐる、龍頭下三尺六寸直径二尺四寸厚さ三寸で明治三十四年の火災には鐘楼堂が焼失したが之この梵鐘には何等の異状がなかった、昭和六年和田英作の寄進にて鉄骨の鐘楼堂が建立されて居る。

銘に曰

一聽ゝ鐘声ゝ當願ゝ衆生脱ゝ三界苦ゝ速證ゝ菩提ゝ

発願主　柴田正念尼

鑄工　弘前駒越　中村　栄　　當地諸中及十方施主

大正十四年九月三代聖心和尚の代に至り大本山増上寺道重大僧正より中興開山弟を授與せられ爾来現代に及んで法燈永えに燈いてゐる。

一歴世

開基　正覺三十三世圓運社良正上人　龍禅（遷化　聖心寺の部に有）

二世　英蓮社哲誉上人　　聖顕

三世　現代　　明治四十四年一月十一日遷化　聖心

一境内

寺屋敷　九百五十五坪

本堂　縦七間　横六間　四十二坪

庫裡　仝五間　仝十二間　六十坪

鐘楼堂　仝二間　仝二間

一什物

阿弥陀如来　一体

この什物は作者不明なれども法田善光寺の分身阿弥陀如来の分身にして東北近国には無き珍宝なりと云ふ。

一阿弥陀寺沿代

和田典作　桜田平八　鎧山宇一　山口麦吉　石岡由藏

墓記

川村門三郎　この人は遠州流挿花師匠である、弘前に生れ後市外筒井村浜田に移り千弘庵一宗と称し門人に挿花教授をされてゐた、行年六十余歳で明治二十三年十月三十日死去、現今其高弟伊香節太郎は師傳を受けて二世千弘庵一節と号す教授をつゝけてゐる。

一宗派　一縁起

将養山蓮得寺　真宗大谷派東本願寺末　青森市浦町野脇一番地

雷森縣所藏浄土真宗一派縁起に曰

蓮心寺塔頭

蓮得寺開基釈氏玄可草建矣

惟從寛文八戊申歳含及千今年而歴数三十四年

元禄十四辛巳龍聲九月　日

右の如く當寺の創基は寛文八戊申年四月釈玄可師の建立せられし寺院であって、始め蓮心寺境内地の一部三百四十坪を寺屋敷に申受け本堂庫理として竪五間横六間柾葺の竣成を告げた、爾来昭和二年に至る迄歴世十三代を経二百四十年の間同地にありて蓮心寺附属布教寺として門信徒の教導に從ふてゐたのである、此間明和の地震明治四十三年に於ける青森大火の災厄に遭ひ明治初年頃には函館戦争の桁官屋(長州屋)が屯所となり明治大帝御巡幸之折には高官随員の宿所となる。大正十年に至り累き

に類焼せし本堂を復興し全年宗祖六百五十年の遠忌法要を行ふたのである。

越えて昭和四年十月第十三代釈義壽代本山の方針に従ひ独立の一寺となれり、

當市米町島津円次郎氏浦町野服一番地なる二百十五坪を寄進せられ寺院敷地とし、同五年十一月移轉改築成り遷佛式を行った、現在壇徒五十戸信徒三百戸を有し以て今日に至ってゐる。

一歴世

開山　玄可　元禄十四年辛巳二月十四日遷化

二世　證往（湛月）　三世　恭可　四世　観憧　五世　喬観

以下歴代住職殆んど不明に属しあるを以て今は其知りたる分たけを左に掲くることにする。

三世より五世まで不明

六世　恵往

この六世は北津軽郡鶴田村教願寺より出で佛學の造詣深く宗門に頭角を顕はせしが不幸三十余にして入寂せり。

七世　託願

八世　自天

九世　恭道

十世　託縁

十一世　義融

義融師は幕末の頃京都本願寺高倉學寮にありて七ケ年の業を了へて帰国し当時の監獄創設の時の教誨師となる、無慾の人にして慈善を施し徳行の聞えあり晩年死期を豫知し遺訓を残して七十三歳にて命終る。

十二世　義隆

明治二十八年一月一日遷化　十三世出生と同日也。

十三世　現代　義壽

明治二十八年元旦生　眞宗大學卒業　學師、僧都、二補セラル。

一境内

現在敷地坪数　二百十五坪

建物

本堂　五十二坪　縦六間　横六間

庫裡　三十五坪　縦三間半　横十間

一什物

浄土真宗一派什物記（青森縣所藏）に左の如く記載されて今に至る当寺に襲藏されてゐる。

一本尊阿弥陀之木佛　立像御長三尺一寸台座共　一体

本寺常如上人代

右一世玄可代安置　延宝五丁巳年二月十五日御免許

一親鸞上人之真影　本寺一如上人御裏書　一幅

右同代　貞享三丙寅年六月二十七日御免許

一本寺連如上人之真影本寺常如上人御裏書　一幅

右同代　延宝七巳未年六月二十七日御免許

一三具足　右一世玄可代　三通

一机　右同代　三脚

一香盤　右同代　二

一輪燈　右同代　三

一和讃光机　右同代　一通

一御文五帖一部　右同代　一通

一浄土三部經　右同代　二部

一鈴　右同代　一口

剃髪師蓮心寺三世智良

生国御当地青森二世湛月年三十一

其後に於ける什物左の如し

聖徳太子木像　一基　阿部宣七作

本尊宮殿須弥檀　一基　安田元吉寄進

月天子畫像　一幅　鎌倉期作　和田友三郎寄進

一蓮得寺總代

檀徒總代　夏原千次郎　津幡実　小島庫吉　西谷初五郎　田沼良三

信徒總代　高谷英太郎　久我大右エ門　藤林豊作　―一八四―

以上

明耀山光行寺

青森市松森町二十七番地

一宗派　真宗本願寺派

一縁起

明耀山光行寺は慶長十六年辛亥年六月紀伊国海部郡和歌村性慶寺正珍上人の開基であつて寛永年間堀川本願寺准如上人の代に堀川本願寺末寺として紀州牟婁郡新宮村字横町え堂宇を開き寛永七年に至つて寺號を公称し爾来盛衰あり乍も明治廿四年に至り中興開基仁本法恵法師奥羽巡化の際法縁同行の賛助勸請により之を現在の地へ移轉するに決し仝廿四年十二月本山当局並に諸官廳の許可を得仝三十年本堂並旧庫裡を建立された。現在の建物はそれである、開末門信徒の増加に伴ひ寺有墓地の設定の為め市当局者の恢賛を経て土地を市に献納して現在の浪打公共墓地、附属墓地を開き教田の開拓と檀信徒の教導に専念し来りしが法恵師の遷化に遭ひ法嗣二世教恵師其前緒を継ぎ之が苦心経営に当り本堂内部の造作及諸設備の荘厳を完成し更に明治四十年三門を建立されたが惜い哉青天

―一八五―

大火で焼失された、続いて大正十年九月鐘楼堂の竣工を告げ同時に梵鐘を鋳造された（径二尺五寸目方百四十四貫其鐘銘は左の如くである、大正十年宗祖大師六百五十回大遠忌法会を修行し本山及教区諸寺より出座し空前の盛況を呈した大正九年西本願寺勝如上人の参詣あり大正十五年厳浄院鏡照尼公の一宿参詣あるなど当寺移轉開創の素願強んと茲に完成されたのである、当寺の創立よりの年代を一括すると開基より三百十四年を経過し寺號公称より三百〇五年青森移轉より四十四年を閲してゐる法燈の耀き益々高く以て今日に至つてゐる。

一歴世

開基　正珍上人

中興開基　一世巧善院法恵

二世（現代）教恵

一境内　七百坪

寺屋敷

明治三十三年九月九日遷化

本堂　東西十一間五尺　南北九間

庫裡　建坪　九十三坪

鐘楼台

一什物

一本尊阿弥陀如来　木佛尊像　一体

一阿弥陀如来絵像　一幅

右開創以来の傳承の什物

一本願寺准如上人　一幅

寛永七庚午年二月三日附裏書あり開祖住職釈願正法師代下附されしもの

一寂如上人木佛尊形　一体

元禄八乙亥年二月十日附裏書あり光行寺住職長祐法師代下附されしもの

一厳浄院鏡照尼公遺物　一百余点

一鏡如上人白衣　一着

一鐘銘　鏡如上人染筆銘曰「響流十方」
大正十年六月九日
京都高橋才治郎鋳造

善知鳥山　一念庵

青森市大字安方町八十番地

一宗派　浄土宗　名越派　正覚寺末

一縁起

當庵は始め善知鳥山臨済寺と称されたことは記録に見えてあるが其時代年数は殆んど不明である後代に至り住職の居住もなく堂宇も荒れたるまゝに任せ自然廃寺の状態になつてゐた。

天和三壬戌年八月二十三日になつて、青森市正覚寺六世察蓮社利山和尚老齢後この地をトして一寺庵を建立し之を常行念佛一念庵と名つけこゝを隠居所とされた。之を當庵の開基とされてゐる、この年より数へても已に二百五十三年を経過してあるので、臨済寺と唱へし時代に遡れば古き縁起を有せることたけは想察することが出来る。以後七世を重ぬる間に尼僧の住職たることは三代つゝいて八世善光和尚の代に至り創立当時の建物は明治四十三年の大火にて焼失の厄に遭ひ、大正三年十月十日に至り現在の本堂及観音堂を再建され昭和二年五月馬頭観音堂を建立され

た等この和尚は実に当庵中興につとめた人である。当庵は寺院資格に十五等進能分寺で今では信徒三百余名に上つてゐる。詳細は古記録の乏しきを以て充分の記述を為し得ざるを遺憾とするが後日文書の発見次第に補足することにする。

一歴世

開基　正覚寺六世察蓮社・利山

二世　善光

三世　利嚬

四世　貞玄

五世　妙念尼

六世　光月尼

七世　樂善尼

八世　善光

九世　聖導　昭和四年九月十二日入寂　兼務住職東京深川霊岸町双樹寺へ轉任

十世　元明　現代

一境内

寺屋敷　百六十二坪

本堂　東西四間半南北三間半

其他

観音堂　三十五坪　五間ニ七間　東西二間半南北七間

一什物

一阿弥陀如来　一體

一地蔵尊　一体

身丈　六尺　傳慈覚大師作

一巌上観音座像　一体

身丈　六寸　傳行儀作

一馬頭観音座像　一体

一鉦鼓　一個

元禄四年正月吉作

一鉦鼓　一個
　徑　一尺二寸
（銘）南無阿弥陀佛
　　干時享保第九甲辰四月五日志
　　施主恵町中敬白

一古半鐘　一個
当庵に古き半鐘が一個あつた、安方町に警鐘台のあつた頃、青森市消防組の警鐘に利用されてあつたかいつの頃か之も廃されて今は善知鳥神社の社庫に納められあるといふ、半鐘には一念庵の銘が刻されてある、又當庵の古き記念物たるべしと思はる。

一一念庵總代　桜庭清助　竹田三蔵　小倉源一郎
　　柿崎源吉　松井喜太郎

圓覺山清涼寺

青森市大字造道字沢田九十一番地

一宗派　曹洞宗　弘前泉光院末

一縁起

当寺は大正十三年九月廿九日弘前泉光院住職柿崎素明師の建立された処で青森市内佛閣中尤も新しい寺院であるが、其由緒を調ふると岩手縣盛石町清涼庵の移轉されたので素明師の当寺建立に就ての苦心經営も大なるものがあつた、今其大略を物語りて縁起に代えやう。

素明師は本縣弘前に生れ梅林寺住職齋藤達明和尚の膝下に長じ、後遠州可睡齋日置黙仙禪師に隨待すること実に十余年にして曹洞宗教導講習院に入り、業卒へて東京曹洞宗務院に奉職して宗務に関係すること七年、其間東京市内の布教に従事、大正三年師僧の遷化に遭ひ師跡相続して泉光院住職となり第八師團軍人布教師を務めてゐた、大正四年には元弘前各宗共同経營であつた児能院幼稚園を自己独立経營に引受け、大正十一年には中津軽郡種市村へ京安寺といふ新寺を建立する等宗門布教の為め

全力を傾注されてゐたのである。

時偶々青森在住の篤信の人々より青森市の現在将来の為めに一寺建立の提議を受けたのである、つらく素明師も考ふるに青森市今や人口六万戸数一万を越え東北屈指の都会に当りしも各宗寺院僅かに六ケ寺に過ぎず、信徒一ケ寺の平均割合は他都市に比して非常に多く葬儀法会に忙殺されて布教傳道の餘地が乏しい。且又市は最近異常な発展彩歩を来たしたもの、其に伴ふ出世間的超越的なる精神教化の道場としては殆んどない、こゝに同師は青森市内一寺建立うやうと慰霊の間二度に渡り万死の間に一生を得る奇縁を経験されたが師は是れを以て佛天の加護に依ると信じ御恩報謝の為めに愈々心願を堅固ならしめたのである。

愈々新寺建立の計画を立て帰県されたのは大正十三年五月廿八日である、以後各方面活動の結果青森市造道字澤田九十一番地則ち現在の寺院敷地を以て適当の候補地と決定された。斯く新寺建立の曙光が見えしもの、新寺建立は絶對に不可能であるのである、で何處からか寺号の移轉を計画せなければならない。再三東京の大本山や宗務院に交渉したが之亦

容易に手に入れ難い、漸くにして岩手縣釜石町に廃絶同様の庵寺あるを探知し上閉伊郡釜石町石應寺に至り山主菊池智賢老師に初めて會見して希望を歎願した、同師いふ石應寺末寺に清涼庵といふ堂庵がある明治十四年に町内の火災にて類焼したまゝ再建せられない内に明治廿四年再び町内大火で本寺石應寺も焼失した為め今日では殆んど廃滅同様なるも有力なる信徒等の将来必ず復興の計画もあるからとて譲渡の儀は断然拒絶された。素明師の落膽実に想像に餘りあることである、再三懇願が結果漸く老師の同情を得て承諾を得ることになつたのである、則時千葉者と協議をこらし各方面千流上交渉の為め二日三夜不眠不休の活動をつゞけて思ひの外に希望は早く達し大正十三年九月廿六日を以て岩手縣知事より石應寺末清涼庵を青森縣東津軽郡造道村へ移轉の許可を得たのである、更に清涼庵の名称を清涼寺と改称の許可を得て一面観世音菩薩を本尊とし本堂庫裡土蔵鐘楼台等を建立し大正十四年五月十四日入佛式を行ひ以て今日に至つてゐる。而して本堂は仮建立になつてゐるので新築工事の計画を確立し本堂五十六坪(幾七間横八間)然背堂三坪工費八万七千余圓の豫算

となつてゐる。

この寺の山號に就ては大本山永平寺貴主曹洞宗管長北野元峰禪師より素明の號に對し圓覺と賜つた圓は大圓鏡にして覺は悟りの義であり元峰禪師は素明の不斷の努力身命を惜まざる精神を嘉みし此号を下されてゐた更に山號を請ひしに圓覺山と其低に揮毫を下附されたとのことである。

一、境内

一敷地　坪數　三百二十坪

一本堂　三十坪

一庫裡　三十八坪五合内二階七坪五合

一土藏　七坪五合

一表門　三坪

一鐘楼台　四坪

一、清涼寺歴代人

田中豊　七、塚村新太郎、武田徳明

柿崎倪

梵鐘鑄造

當寺開創と同時に寺檀の協力を以て梵鐘を鑄造されそれは左の如く刻されてゐる。

大正十四年旧九月吉日

鋳工弘前市鍛冶町坂本久左工門造之

同時に半鐘も鑄造された。

第一種本願寺所屬説教場

青森市大字長嶋（朝日町）二十六番地

一宗派　真宗大谷派

一縁起

明治三十六年九月廿六日青森市大工町　番地へ設立許可

明治四十三年五月二日類焼に罹る

明治四十三年十月三十日大工町より現在の地へ移轉許可

一擔任教師

初代　北條普照（設立者）

二代　高岡正渕

明治四十一年十月十七日交代届出大正四年九月辞任

北海道天塩国和市願正寺住職となる

三代　宮川隆秀

大正四年九月十六日石川縣小松ア町建慶寺住職より兼任し来る

一説教場敷地　二百三十一坪

一建物　二十九坪内
一庫裡　二十五坪
一物置　四坪

青森觀音教會所

一所屬宗派の名称　曹洞宗慶祥寺附屬
一安置佛の称號　聖觀音菩薩
一設立者　秋田縣由利郡東瀧沢村前郷
慶祥寺住職　矢萩賢宗

一設立の目的
青森市は本宗檀信徒多數有之其教化善導及宗教儀式執行の必要を感するも、当市内同宗寺院教会所未だ不便不敏信徒の熱望により之を設立する。

一出願年月日　昭和七年十一月十五日
一宗務院指令　昭和八年六月一日
一縣廳許可指令　昭和八年六月十三日
一建物及敷地　青森市大字浦町字橋本二百八十五番地

一観音教会所建物
平屋建亜鉛葺 間口八間 奥行九間 一棟
玄関 間口二間半 奥二間半
此坪数 八十一坪
一附属建物平家全 三棟
此坪数 九十五坪二合五勺
以上 青森市浦町 阿部太右エ門寄附
一敷地坪数 五百七十二坪四合八勺
以上 青森市陣場町村本喜四郎敷地

一擔任教師
第一代 設立者 矢荻賢宗 昭和八年七月十四日許可
第二代 嶋瀬龍清 昭和九年四月廿三日変更
埼玉縣秩父郡西和村大龍寺住職より轉住
一設立出願人

慶祥寺住職 矢荻玄宗 法類惣代 渡會佛海
末寺惣代 近藤閑禪
秋田慶祥寺檀徒惣代 水村米吉 佐々木五郎八 高橋久治
三浦亀之助 鈴木万吉 三浦隆三
小館保次郎 石館喜久造 中村典助
観音教會所信徒惣代 仲野忠二 阿保定吉 阿保七五郎
本間多七 高橋春吉 和田宇兵エ
斎藤儀三郎 塩谷謙三 吉谷吉久郎
伊藤定五郎

一什物
一大般若經 大百巻
一大涅般大像 大幅 一軸
一聖観音画像 一軸
一文珠菩薩画像 一軸
一普賢菩薩画像 一軸

一身代地蔵尊木像　一体

以上

二〇四

遺補

前記江近屋と藤林屋に関し天保八年青森町旧功御尋書上調左の通り

○江近屋善五郎　（蓮心寺）

一元文五申年ヨリ安政七戌年まで献納御用金弐千六百十四両一分二朱

一寛保元子年ヨリ明和六丑年まで施與米四千百八十五俵

一宝暦八年まで施與米弐千二百五十俵

一天明四甲辰年七月銭二貫目上納

一天明六午年六月金三両銭二貫二百目上納

一同八申年三月銭一貫五百目上納

一宝政七申年献上金十二両

一文政十一子年為冥加金二十両

〆米六千四百三十五俵金二千七百十七両一分一朱銭七貫七百目

○藤林屋源右エ門（蓮心寺）

一元禄十七年（申）御用献上金二百両

一宝永六丑年上納銭二貫五百・二十匁六分三厘及一貫七百二十二匁二分三厘

二〇五

一正徳三巳年御用金五両
一元文二巳年上納銭六百六十七匁七分九厘
一延享二丑年施米百二十俵御用金三十九両
一寛延二巳年ヨリ天保八酉年ヨリ御用金百四十八両五分施與米五俵
メ米百二十五俵金二百九十四両二分銭四貫九百十匁

○官修墓地　常光寺関係の分左の如し

竹庵明杯居士　徳山藩山崎隊小者竹藏之墓
明治二巳巳正月十三日死亡行年三十一歳

義學法光信士　伊州輜重方廣瀬佐兵衛童保
明治二巳巳年四月十八日死亡

○官修墓地　蓮華寺関係の分左の如し

得入院法秀信士　備後福山藩戦死　河村光興
明治元戊辰十月於箱館戦死

昭和九年十二月五日印刷
昭和九年十二月十日發行
非賣品
著作兼發行者　青森市大字寺町四拾六番地　一戸岳逸
印刷所　青森市大字寺町四拾六番地　青森通俗圖書館
印刷人　青森市大字寺町四拾六番地　一戸亢
發行所　青森通俗圖書館
復製不許

終

362
367